

〈論 文〉

アイヌ語千歳方言における *siran* の用法

佐藤 知 己

目次 1. はじめに
2. *siran* に関する先行研究
3. 千歳方言における *siran* の用法と問題点
4. *siran* と証拠性(evidentiality)との関連
5. *siran* とモダリティ(modality)との関連
6. *siran* とアスペクト(aspect)との関連
参考文献

1. はじめに

本論で扱う*siran* という形式はアイヌ語のテキストにしばしば現れるが、その意味、機能が十分に明らかになっているとは必ずしも言えず、特に、日本語に訳する場合に困難を感じる形式の一つである。以下で詳しく論ずるが、実はこの形式は「証拠性」、「モダリティ」、「アスペクト」のような、単独で論じても扱いが容易でない、複数の文法現象が複雑にからみあった形式である。しかも、構造や機能が平行しているとみられる類似の形式も多数ある。概略的に言っても、形態的、機能的に平行する*humas*、*hawas*、共通する形態素 *sir* を含む *siri ne* およびこれと平行的な構造、機能を持つ *ruwe ne*、*humi ne*、*hawe ne* などがある。これらの諸形式はアイヌ語の研究上極めて興味深いとはいえ、*siran* とこれらすべての形式との関連をもれなく論ずることは筆者の能力や許された適正な紙幅を超えるものである。以下では、やむを得ない場合はこれらの関連形式にも適宜言及するが、基本的には、*siran* と直接関係のある形式や構造になるべく限定して議論を進めていくことにする。

2. *siran* に関する先行研究

siran に関して単独に論じたものはこれまでのところないようであるが、先行の主なアイヌ語の記述には *siran* について触れたものが少なくない。代表的なものとしては以下のようなものが挙げ

られる。量的には多いとは言えないが、この形式が古くから研究者の関心を引いてきたことがうかがえる。

金田一(1931: 195-196):

さてこの包括的に漠然たるものをあらはす *shir* が *-an* (在り)、*-ki* (する)、*-iki* (物す) などの主格の關係に置かれて全く「非人称」的な役目をしてゐる:—

Pon tono an hine shiran. 昔或所に若殿があつた (とさ)、(*an hine shiran* で、「或所に……があつた」)。

Apto ash anke shiran. 雨が降りさうだ。

雨 降 らんとする 模様あり

Apto ash anke shiriki. 雨が降らうとしてゐる。

雨 降 らんとする 模様せり

Apto ash anke shiriki. 雨が降りさうである。

雨 降 らんとするさうした模様なり

shiriki の方は動作状態の前の一語を受けて、それだけについて云つてゐる。雲が動いて雨降りさうだとか、風がさあと来て雨になりさうとか。

shiriki の方は、*iki* は「物す」といふことで漠然と包括して全體的に受けてさういふ雰圍氣さういふ環境だといふやうに指す。

shiran は動作でなしにやはり靜的な状態の存在をいふし、それに對しては *shiriki* も *shiriki* も動的である。

金田一(1931: 197):

・ ・ ・ *kane an.*

・ ・ ・ *kane shir-an*

も同様の關係で、*kane an* は前の状態をあらはす「一語」をうけて「さうなつた」ことを云ふだけ。

shir-an の方だと、前の「事全體」を受けてさういふ事態がなつたといふ。

金田一の主な指摘は、*shiran* が「非人称」の形式であるという点、「状態」を意味するという点、趣旨は必ずしも自明とは言えないが、前の「事全體」を受けると述べている、という点の三点にまとめられるであろう。

知里(1936[1974]: 159):

(g) 見説法

apto ash anke shir-an. (雨が降りさうだ)

雨 降らんとする模様あり

apto ash anke shir-ki. (雨が降らうとしてゐる)

雨 降らんとする模様なり

apto ash anke shir-iki. (雨でも降りさうだ)

雨 降らんとする さうした模様なり

[注意] *shir-ki* は動作状態の一部を受けて、それだけについて云つてゐる。

雲が動いて雨が降りさうだとか、風がさあと来て雨になりさうだとか。

shir-iki の方は、*iki* は「物す」といふことで、漠然と包括的に全体を受けて、さういふ雰囲気、さういふ環境だといふやうに指す。

shir-an は動作でなしに、やはり静的な状態の存在を云ひ、それに対しては *shir-ki* も *shir-iki* も動的である。

知里の記述は金田一とほぼ同様と見てよいであろう。特に「静的な状態の存在」に力点があるようである。

中川(1995: 221):

シラン *siran* 【動1】 ①という(視覚的)様子である。②(漠然と)ある状況である; パナンペ・ペナンペのような三人称語りの物語では、出だしの部分にこの動詞が使われることが多い。

①アット アシ アンキ シラン *apto as anki siran* 雨が降りそうだ [N9209252.FN]

②ネノ シラン コロ アナクネ ソモ エキムネアン ペネ

nenō siran kor anakne sono ekimne=an pe ne そうということが起こったら、山に行くものではないぞ [N9306011.UP]

パナンペ アン ペナンペ アン マ シラン ペ ネ アクス *Pananpe an Pananpe an wa siran pe ne akusu* パナンペがいて、ペナンペがいたのだが [N9211272.UP]

中川の記述は、*siran*に「視覚の様子である」、「漠然とある状況である」という二つの意味を立てるといふ点と、三人称語りの物語の出だし部分に使われる、という点の二点にまとめられる。金田一の例文にも物語の出だし部分と思われる用例が含まれているが、中川はこの事実を明示的に指摘

したものと言える。また、知里は「見説法」という用語を用いているが、同様の内容の中川は「視覚的」という表現で説明しているとみることができる。

田村 (1996: 646-647):

síran シラン【完動】 síir-an ① (・・・で) ある、状況が(そう) になっている。maratto an kor síran マラット アン コロ シラン 酒宴が行われていた。(W言い伝え) i-etok un aynu sinotcaki haw as kor síran イイエトク ウン アイヌ シノッチャキ ハウ アシ コロ シラン 私の行く手にアイヌが歌う声がしていた。(S民話) uunukor utar oka híne síran ウウヌコロ ウタヲ オカ ヒネシラン 母と子が住んでいた。(W民話) a=erámasu no síran pe ne kusu アエラマス ノ シラン ペ ネ クス おもしろいような状態になっているので。(S会話) ene an tennep an hike a=i-núkare póka somo ki no síran hi an エネ アン テンネヲ アン イケ アイヌカレ ポカ ソモ キノシラニ アン このような赤ちゃんがいたのにいままで私に見せてもくれなかったんだなあ。(W民話)・・・(中略)・・・☆参考 民話の冒頭で三人称の登場人物を紹介するときには、主語を特定しないこの完全動詞形が用いられる。

田村の記述は、síran が「状況がそうになっている」という意味であるとしている点で、他の研究者とほぼ同様な解釈をしているとみてよいであろう。また、中川同様、síran が三人称の登場人物の紹介の時に用いられることをはっきり指摘している。

佐藤(2008: 56, 57, 194):

apto ruy noyne síran. 「雨(apto)が降る(ruy)ようだ(noyne síran)。」

síran 「～ようだ、～の状況だ」:

ohasir an ruwe ne noyne síran. 「留守である(ohasir an ruwe ne)ような様子だ(noyne síran)。」

「らしい、ようだ」を意味する noyne の用法:

動詞人称形+noyne +(an, síran, húmas)で、「～するらしい、～するようだ」という意味を表す。
toan kur mos wa an noyne. 「あの人(toan kur)目が覚め(mos)ている(wa an)ようだ(noyne)。」
taan kur ihoski noyne an. 「あなた(taan kur)は酔っている(ihoski)ようだ(noyne an)。」(siran)。
tane ku-ray noyne húmas. 「もう(tane)私は死ぬ(ku-ray)ような気がする(noyne húmas)。」

佐藤の記述は散発的な指摘にとどまっており、まとまったものとは言いがたい。また、実例を挙げるだけで、理論的な分析も不足している。しかしながら、少なくとも、*siran* を含むこれら一連の形式が「らしい、ようだ」のような意味（推量、徴候性判断）を表すものであるとする点では一貫している¹。

以上、ごくおおまかに、*siran* に関するこれまでの主な記述を概観したが、表現の違い、ニュアンスの違いはあっても、ほぼ共通しているのは、*siran* が「そういう事態、状況である」という意味を持つ、としている点である。おのおのの説明は、多くの例文を挙げているという点で大いに参考になるし、また、意味や用法の記述は多くの点で一致し、ある程度本質を衝いたものであることは疑いないが、他方、「そういう事態、状況である」という説明は、*siran* という形式の一種の形態素分析、あるいは、語源分析としては妥当なものと考えられるが、*siran* の機能そのものの説明としては必ずしも十分なものとは言えない点があることは否定できない。つまり、「状況がそうになっている、そういう事態がある」という表現自体は、どのような事象に対しても原理的には適用可能であって、そうなると、この表現が用いられた場合と用いられない場合とでどのような差異があるのかをこのような説明のみで説明し分けることは困難であるからである。例えば、田村の例文にある、*haw as kor siran* について言えば、*haw as* は「声が出た」、*haw as kor siran* は、「声が出つつ、そういう状況があった」ということになるであろうが、論理的には「声が出していた」と「声が出ている」という状況があったは、ほぼ同じ内容であって、そうなると *siran* の機能を必ずしも十分説明しているとは言えないのではないだろうか²。それぞれの形式の逐語的な意味に加えて、これらの形式の結合が全体としてどのような機能を果たしているのかについて、さらに説明を加える必要があるであろう。

3. 千歳方言における *siran* の用法と問題点

千歳方言における *siran* の用例はたとえば次のようなものである³。

¹ 以下では「ようだ」という解釈が実は *siran* のような形式の特性を考える上で不可欠なものであることを述べる。なお、千歳方言では *siran* のアクセントは第一音節にあるが本文中では特に記さないことにする。

² 誤解のないように述べておくと、田村や他の研究者の解釈が誤っていると主張したいわけでは必ずしもない。言語学的にどのような形式なのかを明確にした上で訳語を与えるべきではないか、という、ごく当然のことを述べているにすぎない。なお、以下の議論を考慮して解釈すれば、問題の形式には視覚による証拠性と概言のモダリティを表示する *siran* が動作継続のAspect表現を形成する *kor* と共に用いられているので、「(はっきりとはわからないが) 見たところ、どうも人間が歌を歌っているようだった」という意味を表している可能性がある。

³ 以下、さしあたり必要な時点までは、*siran*、*humas*、*hawas* の機能は保留とし、それぞれ「(そういう) 状況である」、「(そういう) 感覚がする、(そういう) 音がする」、「(そういう) 声がする」などと仮に訳しておく。なお、語注に使用した略号は以下の通り： 1=一人称、不定=不定人称、他=他動詞、自=自動詞、主=主格、目=目的格、単=単数、複=複数、雅=雅語。

- (1) tokap anakne arikinne sirpirka wa siran ma oro wa,
昼間 は とても 天気が良い て 状況がある て そこ から
sirkunne yakun suy ruyanpe an nankor.
暗くなる なら また 雨 ある だろう
「昼間はとても天気良くて、そういう状況であって、そして、暗くなればまた雨になるだろう。」

これらの例文は、金田一(1931)の「静的状態の存在」、中川(1995)の「視覚の様子である」、「漠然とある状況である」、田村(1996)の「状況がそうになっている」という解釈がうまく当てはまる例であって、特に何の問題もないように見える。つまり、siran は sir「様子、状況」、an「ある」と分析され、sirpirka「天気が良い」、kamuyisirpirka an「快晴である」のような形式と共起して「そういう様子である」、「そういう状況である」という表現を形成している。さらに、siran は、既に触れたように、孤立して存在しているのではなく、同じ位置に現れる、機能を共通にしているとみられる一連の形式 (humas、hawas) とパラダイムをなす。

- (2) nepenepo pirka ponmatkaci ne wa siran a ka a-eramuskari.
なんと 美しい 少女 である て 状況がある か も 不定他主-知らない
「なんて美しい少女であってそういう状況があるのかも誰も知らない。」(=「どれほど美しいかわからない位美しい少女だ。」)

- (3) nepenepo keraan ma humas a ka a-eramuskari.
なんと おいしい て 感覚がする か も 不定他主-知らない
「なんておいしくてそういう感覚がするかも誰も知らない。」(=「どれほどおいしいかわからない位おいしい。」)

- (4) nepenepo a-omap pa humas a ka a-eramuskari.
なんと 不定他主-かわいがる て 感覚がする か も 不定他主-知らない
「なんて人がかわいく思ってそういう感覚がするかも誰も知らない。」(=「どれほどかわいかわからないくらいかわいい。」)

- (5) nepenepo pawetokkorkur patek oka wa hawas a ka a-eramuskari.
なんと 雄弁家 だけ いる て 声がする か も 不定他主-知らない
「なんて雄弁家ばかりがいて、そういう声がするかも誰も知らない。」(=「どれほど雄弁家なのかわからないくらい雄弁家だ。」)

上のような例から言えるのは、siran を含むこれらの形式のパラダイムは、描写される事象の性

質によってどの形式が選択されるのが概略決まっていると見て良い、ということである。すなわち、「*sirpirka* 天気が良い」、「*pirka pon matkaci* 美しい少女」である、という事象の場合は *siran* が、「*keraan* 味がおいしい」、「*a-omap* 我々がかわいく思う」という事象の場合は *humas*、「*pawetokkorkur patek oka* 雄弁家ばかりいる」という事象の場合は *hawas* が用いられており、概略、*siran* は視覚、*humas* は味覚や感情のような内部感覚、*hawas* は「声、話」のような言語情報に対応していると言える。結論的に言うと、これらの形式は、「情報の出所 (information source)」を指示する文法カテゴリーである「証拠性 (evidentiality)」に関連する形式であると言いうことができる⁴。このことから、*siran* は「証拠性 (視覚)」を意味する文法形式である、ということになる。

しかし、千歳方言の関連する他の表現を見てみると、問題はそう単純ではないことがわかる。次の例を見よう。

- (6) *esoyme inkar wa an, ekasi. kamuysirpirka an ruwe ne wa.*
 外を見る ている おじいさん 快晴 ある 事 である よ
 「外をみていなさい、おじいさん。日本晴れなんだよ。」

- (7) *wakka ku-ku kor k-an siri ne wa.*
 水 1単主-飲む つつ 1単主-いる 様子 である よ
 「私は水を飲んでいるのだよ。」

- (8) *ukuran iyotta mean humi ne nankor*
 昨夜 一番 寒い 感じ である だろう
 「昨夜が一番寒かったのだと私は思う。」

- (9) *ha inunukaski. k-oterke yupke wa arka hawe ne wa.*
 はあ 気の毒である 1単主-踏む 強い て 痛い 声 である よ
 「あーすみません。私が踏んだのがひどくて痛いと言っているのですね。」

それぞれに含まれている *ruwe* 「事」、*siri* 「様子」、*humi* 「音、感じ」、*hawe* 「声、話」は文法機能的には文を名詞化する名詞化辞である⁵。その内容が、後の指定詞 *ne* 「である」によって断定され

⁴ 古く金田一、知里も既に「見説法」という用語を用いており、「法」という文法カテゴリーの中で扱っているという点は今日の主流の扱い方とは違うが、これらの形式の本質には既に気付いていると言ってよいであろう。もっとも、近年の証拠性研究の主要な研究者である Aikhenvald (2004) は、ある言語が文法カテゴリーとしての証拠性 (evidentiality) を有するかどうかの基準をかなり厳格にとらえていて、使用が義務的であることを要件の一つとしている。この観点からすればアイヌ語の問題の諸形式を証拠性の形式と規定することには疑問があるかもしれないが、ここでは仮に証拠性という用語を用いる。

⁵ 詳しくは、*ruw-e*、*sir-i*、*hum-i*、*haw-e* のように分析され、名詞語幹に所属形形成接尾辞が付いてできた名詞の「所属形」である。名詞化辞として用いられる場合になぜ所属形を取るのかについては未解決の点もあるが、ここでは触れない。詳しくは佐藤 (2008) を参照。

ている。この種の形式の機能は、例文(6)を例にとると説明がしやすいかもしれない。すなわち、この文では、「今日は日本晴れだ」という内容を聞き手(ekasi「おじいさん」)に対して述べているが、末尾に ruwe ne が付加されている。この ruwe ne は、直前の「外を見ていなさい」という命令を意味する文と、「今日は日本晴れだ」という文とを、談話構造的に密接に結びつける働きをしていると考えられる⁶。「外をみなさい。(なぜそんなことを言うか、ひょっとすると不思議に思うかもしれないので説明すると、その理由はつまり)今日は日本晴れであるという事だよ。」と言っているわけである。さらに、siran が humas、hawas とパラダイムをなしているのと同様に、ruwe ne、siri ne、humi ne、hawe ne もパラダイムを形成することは明白であろう。すなわち、siran、humas、hawas が証拠性の表現だとすれば、共通する形式 sir、hum、haw を構成素に含む ruwe ne、siri ne、humi ne、hawe ne も同様に証拠性に関わる表現ではないか、という推論が成り立つ⁷。佐藤(2008)では、概略、siri ne は眼前の光景による判断、humi ne は内部感覚による判断、hawe ne は発言による判断、ruwe ne はそれらのいずれでもない主観的な推論による判断、という整理をしている⁸。

さて、以上の説明から、アイヌ語には、siran、humas、hawas というパラダイム(以下、便宜的に「名詞+自動詞」型と呼ぶ)と、siri ne、humi ne、hawe ne、ruwe ne というパラダイム(以下、便宜的に「名詞+指定詞」型と呼ぶ)とがあって、双方共に「証拠性」という文法カテゴリーと関わっていることを述べたが、ここで重要な問題が浮かび上がってくる。すなわち、両者は機能的にどう違うのか、という点である。「名詞+指定詞」型が談話の結束機能を持つ可能性については既にも上でも触れたが、その点だけですべての事実がうまく説明できるとは限らない。以下ではこの問題を形態的、統語的、意味的な複数の観点から考察してみることにする。

4. siran と証拠性(evidentiality)との関連

前節では、関連する諸形式と共にsiran が「証拠性(evidentiality)」と関わる形式であることを述べた。しかし、前節では詳しく触れなかったが、よく見ると、これらの形式の間には、証拠性に関して無視できない体系上のギャップ(「空白」)があり、必ずしも斉一的なふるまいを示していないという問題がある。以下ではこの点について考察する。

前節の例文(2)-(5)に代表される「名詞+自動詞」型と、(6)-(9)に代表される「名詞+指定詞」型は、共に証拠性に関わるものであることは例文から明らかである。しかし、実は、これら二つの型の間には微妙な不一致がある。このことを良く示すのは、以下の(10)と(11)の比較である⁹。

⁶ 談話分析では「結束性(coherence)」と呼ばれているものに相当するものであろう。

⁷ これはもっともなことであって、言うまでもなく、です。金田一、知里の時代から気づかれていたことである。

⁸ この整理には問題がある。特に、ruwe ne を「主観的な推論による判断」とするのは説明が不十分で、以下で触れるように「確定した事象、あるいは確信した事象」に基づく判断、のようなもののほうがより適切である可能性もある。

⁹ 以下、直訳を仮にruwe ne「事である」、siri ne「様子である」、humi ne「感じである、音である」、hawe ne「話である、声である」とし、「～のである」と断定的に訳しておく。

- (10) (=1) tokap anakne arikinne sirpirka wa siran ma oro wa,
 昼間 は とても 天気が良い て 状況がある て そこ から
 sirkunne yakun suy ruyanpe an nankor¹⁰.
 暗くなる なら また 雨 ある だろう
 「昼間はとても天気が良くて、そういう状況であって、そして、暗くなればまた
 雨になるだろう。」
- (11) (=6) esoyne inkar wa an, ekasi. kamuysirpirka an ruwe ne wa.
 外を 見る て いる おじいさん 快晴 ある 事 である よ
 「外をみていなさい、おじいさん。日本晴れなんだよ。」

(10)では視覚による証拠性表現である *siran* が用いられ、(11)では「主観的判断による推論」を意味する *ruwe ne* が用いられている。しかしながら、多少表現に違いはあるものの、表現されている内容は「天気が良い」というほぼ同一の事象である。同一の事象に対して、異なる証拠性表現が用いられるというのは、どういうことなのだろうか。このことは、*siran* や *ruwe ne* のような表現を「証拠性表現」としてひとくくりにとまとめただけでは十分な説明になっていないことを示すものと言える。もっとも、同一の事象であっても、観察者の主観的な「とらえ方の違い」によって、異なる証拠性表現が用いられる可能性はあり得るであろう。しかしながら、実際には、*siran* と *ruwe ne* の選択は、場面的要因（観察者の主観的心理状況）に左右されているというよりは、通常は「視覚的証拠」に基づくと言って差し支えない事態が、「名詞+自動詞」型のパラダイムにおいては *siran* が選択され、「名詞+ne」型のパラダイムにおいては *ruwe ne* が選択される、という状況を示している。

- (12) (=2)
 nepenepo pirka ponmatkaci ne wa siran a ka a-eramuskari.
 なんと 美しい 少女 である て 状況がある か も 不定他主-知らない
 「なんて美しい少女であってそういう状況があるのかも誰も知らない。」 (= 「どれほど美しいかわからない位美しい少女だ。」)
- (13) icatkere wa kusu ku-sirsiru wa ku-huraye wa pirka ruwe ne wa.
 汚い て ため 1単主-こする て 1単主-洗う て よい 事 である よ
 「汚かったので私があちこちこすって洗ってきれいになったのだよ。」

¹⁰ 実はこの例文は話者に「アイヌ語で天気予報ができますか」と質問した際に「できる、できる」とおっしゃったので言っていたものである。天気予報であるから、*siran* に対して以下で仮定する「見たところどうも～のようだ」という解釈がよく当てはまる例と言える。

上の例でも、(10)と(11)の例と全く平行的に、「美しい、きれいである」という視覚的に捉えられるはずの事態に対して、「名詞+an」型においては *siran*、「名詞+ne」型においては *ruwe ne* が選択されているのである。これまでのところ、千歳方言において、「美しい、きれいである」のように通常は視覚的に認識される静的状態に対して「名詞+ne」型が用いられる場合、ほぼ例外なく *ruwe ne* が用いられることがわかっている。つまり、*siran* と *ruwe ne* は同じく「視覚的に捉えられる静的状態」に共通して用いられるが、交換可能ではなく、使い分けに関与している言語的条件は今のところ明確でないけれども、一種の「相補分布」と言えるような状況を示していると言える。このように、「名詞+an」型と「名詞+ne」型の諸形式が完全な平行性を示さず、「名詞+an」型のパラダイムが「名詞+ne」型のパラダイムに比べて幾分「簡略」（つまり、*ruwe ne*、*siri ne*、*humi ne*、*hawe ne* の四つに対して *siran*、*humas*、*hawas* の三つしかない）である、ということになる。なぜこのような不均衡が生じるのだろうか。この問題の考察には、*siran* がどのような文脈に現れるかを調査し、その特徴的な機能を明らかにする必要がある。

5. *siran* とモダリティ (modality) との関連

前節で *siran* が属する「名詞+an」型パラダイムが幾分単純なパターンを示すことを述べた。本節では *siran* の用いられる文脈の特徴に注目し、その主原因がモダリティに関連するものであることを述べる。

まず、注目されるのは、例は必ずしも多くはないけれども、「名詞+an」型と「名詞+ne」型の諸形式は、連辞的 (syntagmatic) な関係で現れることができる、という点である。

(14) *nanipeki cise kankotor emaknatara ki*

顔の光 家 天井 輝く する

wa siran ruwe ne anan.

て 状況がある 事 である 実は~のだ

「実は彼女の顔の光が天井に反射しているという状況があったのであった。」

(15) *k-esitciw kor ku-hoyupu akusu seta en-kes anpa*

1単主-転ぶ つつ 1単主-走る と 犬 1単目-端 つかむ

wa ek humi ne pekor humas.

て 来る 感じ である かのよう に 感じがする

「転びそうになりながら私が走ると犬が私を追いかけて来たのであるかのように感じがした。」

(14)は *siran* という「名詞+an」型の形式のすぐ後に「名詞+ne」型に属する *ruwe ne* が用いられている。また、(15)では、「名詞+ne」型である *humi ne* の後に「名詞+自動詞」型の *humas*

を含む形式が用いられている。このような例は、これら二種類の形式が、同一の形態素を含み、語彙の意味でも共通性を示し、さらに全体として「証拠性」という文法的特徴を共有しつつも、基本的な性質が異なるカテゴリーに属する形式であることを示すものと言える。もし、両者が全く同一の文法カテゴリーを表すものだとすれば、それらを連続して用いると矛盾や意味的不適合を起こす可能性が高いはずであるが、そうではないからである（「かもしれない・に違いない」は可能性を意味する同じカテゴリーの形式が連続して用いられているので、通常は解釈が困難であり、不適格とされる可能性が高いであろう）。まとめると、「名詞+自動詞」型と「名詞+コピュラ」型は共起して用いられることがあるので、両者は共通する意味成分を持つてはいるものの、必ずしも同一のカテゴリーではなく、基本的な性質を異にする別のカテゴリーに属する形式である可能性が高いと言えることになる。

次に注目されるのは、例文(16)–(19)である（再掲）。これらは、基本的に同じ枠組みをなす表現の中で用いられており、ただ「証拠性」の種類においてのみ対立する文である。

(16) (=2)

nepeneo pirka ponmatkaci ne wa siran a ka a-eramuskari.
 なんと 美しい 少女 である て 状況がある か も 不定他主-知らない
 「なんて美しい少女であってそういう状況があるのかも誰も知らない。」 (= 「どれほど美しいかわからない位美しい少女だ。」)

(17) (=3) nepeneo keraan ma humas a ka a-eramuskari.

なんと おいしい て 感覚がする か も 不定他主-知らない
 「なんておいしくてそういう感覚がするのかも誰も知らない。」 (= 「どれほどおいしいかわからない位おいしい。」)

(18) (=4) nepeneo a-omap pa humas a ka a-eramuskari.

なんと 不定他主-かわいがる て 感覚がする か も 不定他主-知らない
 「なんて人がかわいく思ってそういう感覚がするのかも誰も知らない。」 (= 「どれほどかわいいかわからないくらいかわいい。」)

(19) (=5) nepeneo pawetokkorkur patek oka wa hawas a ka a-eramuskari.

なんと 雄弁家 だけ いる て 声がする か も 不定他主-知らない
 「なんて雄弁家ばかりがいて、そういう声がするのかも誰も知らない。」 (= 「どれほど雄弁家なのかわからないくらい雄弁家だ。」)

これらの文で特徴的なのは、その意味である。a-eramuskari 「誰もわからない」という否定表現が用いられてはいるが、実際の意味は否定ではなく、正反対の「強い肯定」である。「どれほど美

しい少女であるかわからない」→「どれほど美しい少女であるか、わかるのだろうか、いや、わかるはずがない」→「非常に美しい少女であることが明白だ」。従って、これらは一種の「反語」表現であると言うことができる。すなわち、反語表現の場合に、「名詞+自動詞」型のパラダイムが規則的に選択されているということになる。これはなぜであろうか。また、前節でも指摘したように、「名詞+自動詞」型パラダイムは体系に欠損がある。すなわち、**ruwe ne**に機能的に対応する形式は **siran** であるが、これは形式上は不規則な一種のねじれ現象であって、理論的には **ruwe**の概念形 **ru** を含む「**ru** + 自動詞」という形式が予想されるところである。しかし、実際にはそのような形式は存在しない。

さて、以上の二つの特徴、すなわち、1) 反語表現に現れる、2) **ruwe ne** (確定した事象に関する断定を意味する形式) に対応する表現が欠如している、という二点を説明する言語的特徴とはなんだろうか。結論的に言えば、これらの二つの特徴を同時に満足させる候補者として考えられるものは、「モダリティ」、中でも「概言のモダリティ」ではないかと筆者は考える。

まず、1) の反語とモダリティとの関わりである。反語表現はしばしば疑問表現と深い関わりを持つ。日本語の反語表現の例を挙げれば以下のようなものである。

(20) 歴史的意味をどれほど深く自覚しているのだろう。

(21) 膨大な資金を用いて武器を生産する意味がどこにあるだろう。

以上の文は、「どれほど」、「どこに」のような疑問語を含み、形の上では疑問文であるが、意味は疑問ではなく、「自覚してはいない」、「意味はない」という逆の意味を表す反語表現である。ちなみに、このような反語表現は古い日本語にも頻出する¹¹。

(22) ありもつかぬ都のほとりに誰かは物語求め見する人のあらむ (= 「住み慣れない都のはずれでは、物語を探し求めて見せてくれる人などいるだろうか、いや、そんな人がいるはずはない。」) (更級日記)

(23) 人は夢幻のやうなる世に、誰かとまりて、悪しき事をも見、よきをも見思ふべき「夢か幻のよなはかないこの世で、いったい誰が、わざわざ立ち止まって、他人のやっていることの善し悪しをあれこれ気にする人がいるだろうか、いや、そんな暇人がいるはずがない。」(「堤中納言物語」)

アイヌ語にも同種の表現がある。

¹¹ 原文は鈴木(1969)、相原(1974)によるが、訳はこれらの解説を参考に筆者が付けた。

- (24) *i-hoppa* *hike nep a-e* *wa siknu*
 1単目雅-置いて行く て 何 1単他主雅-食べる て 生きる
kuni p a-ne *nankor a.*
 べき もの 1単他主雅-である だろう か

「私を置いて行ったら何を私は食べて生きるべきものになるだろうか (= 「生きるべきものであるはずがない。死んでしまうだろう。」)

このように、日本語にもアイヌ語にも形は疑問文を取りながら、意味は疑問ではなく、強い否定を表す修辭疑問文 (= 反語 *irony*) があるわけである。ここで注目されるのは文末に現れる表現である。必ずしも義務的という訳ではないが、現代日本語、中古日本語、アイヌ語のいずれにおいても、「だろう」(推量)、「む」(推量)、*nankor* 「だろう」(推量) のような形式が用いられることが珍しくない。このような推量を表す形式と反語文とはどういう関係にあるのだろうか。筆者は日本語の専門家ではないので、あくまでも憶測に過ぎないものではあるが、反語的解釈と推量の形式とは、意味的な観点から偶然でない結びつきがあると考ええる。すなわち、反語文は、形の上では疑問の形を取りながらも、文意としては疑問を乗り越して完全な否定の解釈を選択することを聞き手に求めるものである。そのメカニズムは次のようなものであると考えられる。推量の形式は、事態の成立に対する疑いを表明する形式である。推量の形式を用いると、あらかじめ事態の不成立の可能性が示唆されるので、それが疑問文化されると、事態の成立と不成立とが対等な位置付けにある単純疑問文と異なり、事態の不成立の可能性の解釈のほうがより選択されやすくなるのだと考えられる。以下の例を参照。

「ある？」(単純な疑問、あるのか、ないのか、どっちなのか(確率半々)。比較: 「あるだろうか?」 → 「(ない可能性が十分あるが、それでもやはり) あるのだろうか?」 → 「たぶんないだろう」¹²。つまり、反語の文と推量の形式は言語的に密接な結びつきがあると考えられる。

ここであらためてアイヌ語の問題の形式、すなわち、*siran*、*humas*、*hawas* についてみると、これらが反語的解釈が必須であるような表現において、ある種、慣用句的に規則的に現れるという点は、これらの形式が単に証拠性を指示する表現であるということのみならず、反語と結びつきやすい「推量」あるいは、それと共通するモダリティ(「概言」のモダリティ)の一種を意味する形式(おそらくは徴候性判断)であることを示唆するものである。さらに、これらが概言のモダリティを意味する形式であるとする、このような推論は、*siran*、*humas*、*hawas* という「名詞+自動詞」型パラダイムが内包する体系上の不均衡を説明する上でも好都合ではないかと思われる。「名詞+ne」型は *ruwe ne*、*siri ne*、*humi ne*、*hawe ne* というパラダイムをなし、*ruwe ne* は静的状態、結果状態、あるいは、動作の継続や変化であっても、既に、過去のある時点で継続していた動作や変化自体は終結、成立していて、眼前でプロセスが展開していない場合に用いられるということは

¹² 反語表現に推量的な形式が伴う現象は朝鮮語にもあるらしい(李連珠氏のご教示による)。

既に述べた¹³。「終結、成立、確定」した、いわば「確認済み」の事態について用いられるので、**ruwe ne** には事実であることを確定する、「判断、断定」のような機能が従来割り当てられてきたのだと思われる。他方、**siran**、**humas**、**hawas** のような「名詞+自動詞」型パラダイムが「概言」の意味を持ち得るのは、恐らく、これらが**sir-an**、**hum-as**、**haw-as** のように一語になった「自動詞主語抱合」の構造を持っていることと無縁ではないと思われる。抱合された名詞語幹は、特定性が低く、総称的な解釈しか許されない。ここに含まれている **sir** 「有様、状況」、**hum** 「音、感覚」、**haw** 「声、話」という名詞語幹は、特定の対象に所属する「有様、状況」、「音、感覚」、「声、話」という意味ではあり得ない。「誰のものでも何のものでもない、漠然とした一般的な」、「有様、状況」、「音、感覚」、「声、話」が「存在する、生ずる」という不定的な意味であって、そこから「～のようである、～らしい、～そうだ」のような「概言」の意味が生じるのだと考えられる。ところが、**ruwe** 「確認済みの事実」(所属形) に対応する名詞語幹 (すなわち概念形) **ru** は、そもそも「確言のモダリティ」にふさわしい意味を持っているために、そのような不定的な解釈にはなじまない。「誰のものでも何のものでもない不定の確認済みの事実、事柄」というようなものは想定しにくい。従って、他の名詞と同じように自動詞に抱合されて概言のモダリティを意味する形式を作ろうとしても、論理的に矛盾が生じて意味をなさなくなってしまうので、この組み合わせは体系上の「あきま」になっているのだと考えられる。これに対して、所属形の **ruwe** は、抱合されていない独立の名詞であり、「ある事態に所属する特定の確認済みの事実、事柄」という意味なので、指定詞 **ne** 「である」と組み合わせられて「既定の事実、事柄の断定」という意味を表す形式を問題なく作ることができるのだと考えられる。以上、「反語表現との共起」、「**ruwe ne** に平行する形式の欠如」という特徴は、いずれも問題の形式が「概言のモダリティ」を意味する形式であることを示すものであることを述べた。

以上のように、アイヌ語の **siran** という形式は、結局のところ、「視覚」という「証拠性 (evidentiality)」の形式であると同時に、「概言」(推量、もしくは徴候性判断) という「モダリティ (modality)」の形式でもある、ということになるが、これは、一般言語学的にはどういう意義があるのだろうか。Aikhenvald (2004: 7) は evidentiality は従来しばしば、モダリティの一種と見なされてきたが、証拠性はモダリティとは区別されるべき独立の文法カテゴリーであることを力説している。しかし、アイヌ語の **siran** においては両者は同時に発現しているのであるから、アイヌ語の事例は「証拠性とモダリティは別個の文法カテゴリーである」という Aikhenvald の主張に反する例のようにもみえる。しかし、必ずしもそうではないことは、日本語 (中古語) における証拠性に関連する形式と対比してみると明らかとなる。松村(1981: 79)によると、助動詞「めり」の意味、用例は次のようである (一部抜粋)。

¹³ 「終結、成立」という規定が妥当かどうか、問題もある。特に **ruwe** が未来の事象に関しても使用可能であることは無視できない点である。例: **okkaypo nisatta hunak un arpa ruwe an?** 「兄ちゃん、明日、どこへ行くの?」。未来の事象は、眼前に展開するプロセスでない、という点では過去に終結、成立した事象と同様であると言えなくもない。あるいは、「終結、成立」のような事実確認の場合に加えて、未成立だが予定されている事象に関する「確信」も **ruwe** で表すことができる、ということである可能性もある。なお検討が必要であるが、ここでは、**ruwe** の基本的特徴を仮に「確認、確信」としておく。

推量 目の前で様態をひかえめな気持ちでいう。[ヨウダ、ヨウニ見エル]

すだれすこし上げて、花奉るめり。(源氏物語・若菜) (その尼は、仏前にかかっている) すだれをすこし巻き上げて、仏に花をおそなえ申しているようである。)

あはれにいひ語らひて泣くめれど、涙落つとも見えず。(大鏡・序) (しみじみと話をしあって、泣いているようだが、涙が落ちるとも見えない。)

同様に、松村(1981: 87)によれば、「なり」の意味、例文は次のようである (一部抜粋)。

推定 人の話し声・物音などによって推定する。[ヨウダ。ラシイ]

呼びわづらひて、笛をいとをかしく吹きすまして過ぎぬなり。(更級日記) ((その人は) 呼びあぐんで、笛をたいそうおもしろく熱心に吹いて、通りすぎてしまったようだ。)

ねぶたさを念じてさぶらふに、「丑四つ。」と奏すなり。(枕草子・大納言殿まゐりたまひて) (ねむいのをがまんして、(中宮の御前に) 伺候していると、(夜警の武士が) (丑四つ。) と天皇に申し上げる声が聞こえてくる。)

以上のような説明を見ると、日本語の助動詞「めり」(視覚)、「なり」(聴覚)のような表現は明らかに証拠性に関わる表現と思われるが、実は同時に「推量」の表現であるとも言われていることがわかる。これは、「証拠性」と「推量」という二つの意味が一つの形式の中に必ずセットで現れるからであると思われる。従って、日本語の例だけ見ていると、「証拠性」とは結局のところ、独自の文法カテゴリーではなく、「推量」の一種ではないか、と考えたくなる。しかし、ここで再度、アイヌ語の事例を見ると、同じく証拠性の表現であっても「確言」(断定)の表現と「概言」(推量)の表現の二種類が別個に存在することがわかる。つまり、日本語同様、一つの形式の中に証拠性とモダリティの二つの意味が含まれているとは言っても、アイヌ語の場合は「視覚+概言」、「視覚+確言」という異なる組み合わせを表す別々の形式があるので、視覚の証拠性がアプリアリに推量とだけ結びつくわけではないことを示している。アイヌ語の事例は証拠性とモダリティとが個々独立したカテゴリーであることを主張する上で有利な証拠を形成するものと言える。アイヌ語は「証拠性」という特徴が、日本語と比べてよりはっきりと文法の中に組み込まれている言語だ、ということになるであろう。

6. *siran* とアスペクト(aspect)との関連

以上、アイヌ語の *siran* および同じパラダイムに属する諸形式が証拠性の形式であると同時に概

言のモダリティの形式でもあることを述べた。本節では、問題の形式のうち、*siran* がアスペクト¹⁴とも関わりを持つことを述べる。

先行研究においても、例えば、金田一、中川、田村は、例文や説明を通して、*siran* が三人称体の物語の冒頭で用いられることを指摘している。この指摘は極めて鋭い有意義なものであって、*siran* の性格の考察において欠くべからざる要素の一つと筆者も考える。

中川が既に指摘しているように、千歳方言でも、*siran* はいわゆる「ペナンペ、パナンペ物語」の冒頭に現れる¹⁵。

- (25) *penaunpe an. panaunpe an ma siran pe ne akusu*
ペナウンペ いる パナウンペ いる て 状況がある もの であると
「ペナウンペがいてパナウンペがいたものであったらしいが」

実は、*siran* に関する先行研究では明確に触れられていないが、重要な関連性がある事例として、次のようなものがある。

- (26) *a-macihi an. a-macihi an ma oka-an pe ne hike*
1単他主雅=妻 いる 1単他主雅=妻 いる て いる-1複自主雅 もの である て
「私の妻がいた。そういう状況があったのだが」

- (27) *a-unuhu an. a-onaha an ma oka-an pe ne hike*
1単他主雅-母 1単他主雅-父 いる て いる-1複自主雅 もの である て
「私の母がいた。私の父がいた。そういう状況があったのだが」

いずれも物語の冒頭部分で、*siran* が現れるのと平行的な位置で *oka-an* 「私たちがいる」という形式が用いられている。形式は異なるが、現れる位置から見て同様な機能を果たしている可能性があることは明らかであろう。詳細はなお研究が必要であるが、おそらく、このような位置に現れる *ma* (<wa) *oka-an*, *ma* (<wa) *siran* のような形式は、工藤(1995)がアスペクトのタクシス機能(この場合は背景説明機能)と呼んでいる機能を担っているものと考えられる。これらの形式は共に状態の継続を意味する形式なので、時間の流れの中における事件の進行をいったん止めて、以後の事件が起こる背景事情を説明する機能を果たしているのである。「ペナウンペがいて、パナウンペがいて、そういう背景であって」、「父がいて、母がいて、そういう背景であって」。従って、

¹⁴ 工藤(1995)はタクシス機能を含む広義のアスペクトを「アスペクチュアリティ」という別の用語で呼ぶが、ここでは便宜的にアスペクトという用語をより広い意味で用いる。

¹⁵ アイヌの口承文芸は一人称体で物語られるのが一般的であるが、「ペナンペ、パナンペ物語」などと通称されるものに限っては三人称体で語り始められる(もっとも、途中から一人称体に転換してしまい、最後まで三人称体では必ずしもないようであるが)。

siran は証拠性、モダリティに関わるのみならず、一種のアスペクトとも関連する、複雑な性格を持つ形式だ、ということになる。問題となるのは、場合によって *siran* と *oka-an* が使い分けられる要因であろう。中川(1995)、田村(1996)で既に指摘されているように、やはり物語が三人称で語られる場合に *siran* が用いられる、と言ってよいと思われる。しかし、三人称だと、なぜ *siran* が用いられるのであろうか。人称だけの問題であるなら、そのまま三人称形の *an* が用いられてもよいはずである。ここで問題となるのが、これまで仮定してきた *siran* の「概言のモダリティ」機能である。物語の叙述形式が一人称体の場合はいわば「話者」(物語の主人公のこと。現実の語り手とは一致しない)の直接体験を物語る形式なので概言の形式を用いる必要性はない。しかし、三人称体の場合は、話者の直接体験ではないので概言の形式の方がより適切であると考えられているからではないだろうか。それと同時に、*siran* は概言の形式ではあるけれども、視覚に基づく証拠性の形式でもあるので、完全に間接的な話、というわけではなくて、実際に目で見たと、という意味を同時に表しているわけで、物語に臨場感を持たせる役割も同時に果たすことができるため、このような場合に特に用いられる、ということではないだろうか。

なお、例がそれほど多くないのでなお検討が必要だが、文の中で *siran* の直前に来る事象が現に進行中の事象である場合は、*kor siran* という形式が用いられるようである¹⁶。

(27) *cipta-an kor siran.*

舟を彫る-不定自主 つつ 状況がある

「見たところ、人が舟を彫っているようだ。」

(28) *supuya at kor siran.*

煙 立つ つつ 状況がある

「見たところ、煙が立ち上っているようだ。」

(29) *wakka aneno ratki kor siran*¹⁷.

水 細く 垂れる つつ 状況がある

「見たところ、水がちよろちよろと流れているようだ。」

これらも、証拠性と概言のモダリティの形式である *siran* とアスペクト的形式が組み合わせられた、より複雑な形式だと言えるであろう。

¹⁶ これは、アスペクト的な形式である *kor an* 「ている (動作継続)」、*wa an* 「ている (結果継続)」 と形式の上で平行的である。*kor siran*、*wa siran* は、これらにさらに証拠性と概言のモダリティが加わった形式ということになる。また、これらの他、*noyne siran*、*kane siran* のような形式もあるが、今後の検討課題としたい。なお、ここでは *siran* の訳を直訳とせず、「見たところ～のようだ」と訳してある。

¹⁷ 一応、概言として解釈したが、この例は前後の文脈がないので話者がどういう意図で用いたか判断困難な事例である。なお、検討を要する。

7. おわりに

siran の用法の中には「時が経つ」のような証拠性とは直接関係がないと思われるものもあり、その用法のすべてが証拠性やモダリティの見地から説明できない可能性もあり、問題を残している。しかし、本稿では、siran の文法的に最も重要と思われる機能について、前後の文脈的根拠のみならず、言語学的根拠を提示して、siran という形式が証拠性の形式であると同時に概言のモダリティの形式でもあること、また、接続助詞 wa、kor と組み合わせられてアスペクトの形式も形成する複雑な性質を持つ形式であることを示した。また、証拠性かつ確言のモダリティを意味する形式もアイヌ語には存在することから、アイヌ語の事例が、証拠性がモダリティとは別個の文法カテゴリーであることを示す、一般言語学的に極めて興味深い実例を提供するものであることを示した。

参考文献

- 相原林司 (1974) 『竹取物語・堤中納言物語』 東京: 旺文社.
- Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, Alexandra Y. (2003) Evidentiality in typological perspective. In:
Alexandra Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon (eds.) *Studies in evidentiality*, 1-31.
Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Aoki, Haruo (1986) Evidentials in Japanese. In: Wallace Chafe and Johanna Nichols
(eds.) *Evidentiality: The linguistic coding of epistemology*, 223-238. Norwood:
Ablex Publishing Company.
- 知里真志保 (1936[1974]) 『アイヌ語法概説』 東京: 岩波書店. (『知里真志保著作
集第4巻』所収, 東京: 平凡社.)
- 金田一京助 (1931) 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究II』 東京: 東洋文庫.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 東京: ひつじ書房.
- 松村明 (1981) 『古典文法』 東京: 明治書院.
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 『モダリティ』 東京: 岩波書店.
- 中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』 東京: 草風館.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』 東京:
くろしお出版.
- 佐藤知己 (2008) 『アイヌ語文法の基礎』 東京: 大学書林.
- 鈴木由次 (1969) 『更級日記』 東京: 旺文社.
- 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 東京: 草風館.
- Wierzbicka, Anna (1996) *Semantics: Primes and universals*. Oxford: Oxford University
Press.

Abstract

Some Uses of *Siran* in the Chitose Dialect of Ainu

Tomomi SATO

The Ainu word *siran* is used in various contexts and has been translated in a number of ways by previous researchers. However, its exact functions have not always been so clear. This paper studies it together with other morphologically related forms and concludes for two main reasons (the behavior in so-called “irony” sentences and the lack of a morphologically parallel form of assurance) that although *siran* is actually a form of evidentiality, as has already been pointed out, its peculiarity does lie in the fact that it also functions as a kind of form indicating assumption, i.e., a kind of modality. At a glance, such a conclusion may seem to support the often claimed view that evidentiality should be seen as a kind of modality. However, this paper shows that such a view is misleading and supports the view that both categories are in fact closely related but nevertheless essentially different grammatical categories, as Aikhenvald (2004) strongly claims : while Ainu has a series of evidential forms for assumption, it also has another series of evidential forms such as *ruwe ne* indicating a semantically opposing modality (i.e., assurance). Moreover, this paper points out an interesting and complicate property of *siran* to form various aspectual expressions, the form itself remaining a form for evidentiality and modality.

